

今月の主な内容

- 2・3・4面: 総合文化
- 6面: 【特集】学祭特集
- 9面: 【特集】大日岳遭難事故

神戸大学ニュースネット
NEWS NET
©神戸大学ニュースネット委員会 <http://home.kobe-u.com/top/newsnet/index.html>
関西学生報道連盟共同編集室 〒532-0011 大阪市淀川区西中島3-21-9-502
電話06-6307-1315 FA X06-6307-1316 メールnewsnet@kobe-u.com

しらすな会
現地サポートも万全!
本紙のみの特典あり!
**南紀サークル
合宿情報**
〒649-2211
和歌山県西牟婁郡白浜町2525-4
電話0120-53-1662
<http://www.shirasunakai.jp/>

10月号

六甲祭ゲストは FANKY MONKEY BABYS

テーマ「情熱サイクル」
11月10・11日六甲台で

平成19年度六甲祭が11月10日と11日に六甲台キャンパスで開催される。今年のテーマは「情熱サイクル」。毎年恒例のプロコンサートのゲストにはFANKY MONKEY BABYSを、講演会には落語家の桂ざこばを招くことが決まった。

六甲祭は今年で28回目を迎える。「最高に楽しいものを創るためには、絶え間なく情熱を注ぐ必要がある。そのためには多くの人があつた方がいいが不可欠」と話すのは六甲祭実行委員長の佐野充寿さん(経済・3年)。テーマ「情熱サイクル」にはそんな実行委員らの思いが込められている。

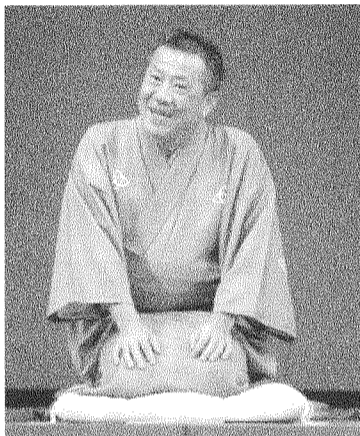
今年のプロコンサートのゲストはFANKY MONKEY BABYS。ライブは六甲台グラウンドのメインステージで11日に行われる。開演は午後4時半

講演会は桂ざこば

の予定。入場無料。10日には六甲台講堂で桂ざこばを講師に迎えて、講演会が行われる。桂ざこばは昭和38年、桂米朝に入門。現在、関西のテレビ番組などにも出演するなど多方面で活躍している。

実行委員特別企画では10日にメインステージで午後4時半から開催予定の「ココロオドル」に注目が集まる。よさこいなどの踊りを5チームが披露。最後に全員で総踊りを行い、会場全体を一つにする。

昨年は約4万人が来場した六甲祭。開催を約1カ月後に控え、「28回目にして最高の六甲祭ができるように現在準備にとりかかっています」と佐野さんは意気込んでい



提供=六甲祭実行委員会

ボランティアの意識を共有

第6回防災ユースフォーラム

第6回防災ユースフォーラムが9月15日から16日にかけて、鶴甲第一キャンパスで開かれた。災害支援や防災に取り組む全国の学生ボランティア11団体が集まり、活動報告やパネル討論が行われた。

同フォーラムは、阪神・淡路大震災から13年目を迎えた被災地である神戸で震災の経験と今後の大学

や学生、市民を通じて構築された災害文化・防災文化の蓄積を全国の学生団体に伝えようと開催された。約60人が参加し、災害支援や防災についての考えや課題を共有した。

中越・KOB E足湯隊の活動報告(学生震災救援隊の益本慎朗さん(発達・4年)は、足湯を通して被災者のつらさを拾い、それ

を専門家などにならねばならない足湯の意義について話した。中越・KOB E足湯隊の参加団体のボランティアチーム「VOL. of NUSA」の斎藤美咲さん(長岡技術大・3年)は足湯を通して「被災者に寄り添って、く中で中越や神戸の経験を学ぶことも可能」と話した。

パネル討論では、ネット

ワークの機能や課題について議論され、「地域の方からの期待が大きすぎる」「ネットワークの活動を引き続きしていくことが難しい」といった課題が挙げられた。益本さんは「ネットワークがあるから震災後すぐに現地へ足湯活動ができた」とネットワークの重要性を示した。

フォーラムを終えて、主催した防災ユースフォーラム事務局幹事の廣本英隆さん(工・4年)は「学生の意識が共有できた」と話した。

【上村絵里】

学祭特集

6・7面

へGO!

関西一円の学園祭ゲスト
載ってます!

若さ輝く初舞台

自劇の新人公演

神戸大演劇部自由劇場の1年生による新人公演「シンデレラストーリー」(作・鴻上尚史 演出・月石みゆ)が9月9日と10日、六甲台講堂で行われた。公演は学生を中心に多くの観客が来場した。

この「シンデレラストーリー」は、従来のシンデレラをよりコミカルに演出。随所に笑いやダンスを取り入れたリスミカルな演技が

観客らを沸かせた。また、面白さを追求する反面「愛とは何か」という疑問に苦しむ王子の姿を表現。愛について考えさせられる内容となった。お城でのパーティーのシーンでは、新人20人が一体となった見事なダンスを披露。観客からは盛大な拍手が送られた。

「観客からの『とても楽しかった』という声やうれしさと感動していた。」

【伊崎春樹】

シンデレラ役を演じた西田麻衣さん(法・1年)。慣れないドレスでのダンスや早着替えに苦労したが、夏休み中の約1か月間、ほぼ毎日練習し本番に備えたという。演出を担当した伊藤美友さん(発達・3年)は公演について「3回の公演の中で、今日(最終日)が一番良かった。個性的な1年生を活かし、芝居の楽しさを伝えられるような台本を書いた」と振り返った。公演を見た工学部の1年生は「自分と同じ世代の人たちがやっているなんてすごい」と話していた。

【上村絵里】

「まちのTシャツつゆうえんち」 七色のTシャツはためく 古着で地域と交流

地域から回収した使い古しのTシャツを使ったイベント「まちのTシャツつゆうえんち」が9月8日と9日、都賀川公園で開催された。主催したのは建築やまちづくりを研究している神戸大院生からなる、まちTプロジェクト実行委員会。学生が直接地域と関わることはできないか。そんな思いから委員長の狩野貴久さん(工学研究科・1年)は、家を必ずあるTシャツを

使おうと考えた。そしてプロジェクトを今年5月にスタート。「まちのTシャツつゆうえんち」が9月8日と9日、都賀川公園で開催された。主催したのは建築やまちづくりを研究している神戸大院生からなる、まちTプロジェクト実行委員会。学生が直接地域と関わることはできないか。そんな思いから委員長の狩野貴久さん(工学研究科・1年)は、家を必ずあるTシャツを

回収したTシャツは約4500枚。当日、空には七色のTシャツがはためき、Tシャツで草履や靴をはき、Tシャツで作ったかばんを作った女の子は「楽しかった」とささやく声から下っていた。

【大野将寛】

「これから社会に出て行く学生と、社会に携わった」と狩野さん。半年に及ぶプロジェクトは、このイベントで終了するが「Tシャツ」という形にはこだわらず、学生が自分たちの枠を超えて考えることは、残ってほしい」と後輩に思いを託した。

【上村絵里】



で出来たテントの中で、スタッフに教えてもらいながら、作品をつくる小学生の姿が見られた。「Tシャツかばん」を作った女の子は「楽しかった」とささやく声から下っていた。

【大野将寛】

「これから社会に出て行く学生と、社会に携わった」と狩野さん。半年に及ぶプロジェクトは、このイベントで終了するが「Tシャツ」という形にはこだわらず、学生が自分たちの枠を超えて考えることは、残ってほしい」と後輩に思いを託した。

【上村絵里】

美術部凌美会 青空の下で展覧会 大阪市大と野外展

神戸大美術部凌美会と大阪市大美術部青桃会の合同展覧会、野外展が9月21日から26日にかけて大阪城公園の教育の塔前広場で開催された。開催期間中は天候に恵まれ、来場者は青空の下で作品を見入っていた。

野外展は毎年凌美会と青桃会が合同で開催している。展示されている作品はすべて幅約1メートル、高さ約2メートルの大きなキャンバスに描かれた油絵。また、野外展は室内での展示と異なる絵を掛ける

【上村絵里】

壁がなく自由に配置できるため、作品が見えやすいよう配置を考えたという。青桃会OBの奈良慶太さん(大阪市大・平成18年度卒)が「室内だと美術に興味がある人が来られるが、野外展ではいろいろな人が来てくれる」と話すように、会場の前を通りかかった人が足を止めて作品を見入る姿が多く見られた。今回作品を出展した本田有紀さん(大阪市大・1年)は「小さい子が見てくれるのが新鮮です」と話した。

凌美会に所属する女子学生(国文・1年)は野外展の作品を見て「いつかは自分もこういう絵をかきたい。自分の絵との違いを認めたい」と話した。今度の野外展は、海外旅行のたのしみや学生生活、けれども大学前期を終え、暑い夏さえも過ぎ去った今、そのどれもが中途半端になってしまった気がする。「可哀さみしい、稼いだ分は遊びに消えて、結局海にも行かなかった。似たような思いを抱く1回生も多いのではな

【上村絵里】

一週間、購読無料。

この機会に新聞を
読んでみませんか?
いまなら一週間お試し
キャンペーン実施中!

<http://www.asa-takaha.com>

朝日新聞ご購読のお申込みは
ASA 高羽
0120-084013
神戸市灘区土山町1-13
※但し灘区内在住の方に限ります。

伏流水

▽大学生生活初めての夏休みが終わった。そして初めての「帰郷」も経験した。僕の実家の近くに

大日岳遭難事故

遺族の全面勝利で和解成立

安全な登山研修願う

支援者へ報告集会

平成12年3月5日、富山県の北アルプス大日岳で行われた文部省(現・文部科学省)登山研修所の「大雪山山岳部リーダー研修会」で大学生11人が山頂付近の雪庇(せっぴ)上で休憩中、雪庇が崩落し滑落。溝上国秀さん(当時神戸大2年)と内藤三恭司さん(当時・東京都立大1年)が亡くなった。

文部省は「雪庇の崩落は予見不可能」と謝罪せず、遺族は平成14年3月、国を相手取り、約2億円の損害賠償を求め、提訴。国の謝罪を求める署名は平成19年6月、30万人分に達した。平成19年7月26日、国が事故再発防止のための安全検討会を設置すること、1億6700万円を支払うことを条件に和解が成立した。

遺族による「全面勝利和解報告集会」が9月15日、尼崎労働福祉会館で行われた。報告集会には、溝上国秀さん(当時・神戸大2年)と内藤三恭司さん(当時・東京都立大2年)両遺族の関係者をはじめ、支援者、神戸大ワンダーフォーゲル部のOBなど約190人が参加。遺族らが涙ながらに挨拶すると、会場からはすすり泣く声も聞かれた。

報告会の冒頭では、亡く



溝上国秀さん(平成11年7月・南アルプス縦走) 北岳頂上で 提供写真

「120%」の勝利和解

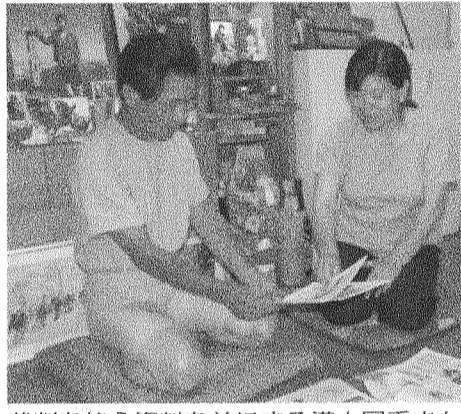
国秀さん両親の7年

「今思えば短かったが、当時は長かった、本当に」。事件発生から7年。裁判開始から5年。そして原告勝訴の判決が下った。一審判決からは1年以上が経過していた。

国側の控訴によって始まった大日岳事故の第二審は、原告の主張が全面的に認められる内容で和解が成立した。この和解内容について国秀さんの父・不二勇さんは「120%の勝利」と話した。

「100%」とは、一審判決で認められた国から遺族へ対する損害賠償が再び認められたこと。そして「20%」とは国が遺族への謝罪をするとして、冬山登山研修会を「安全検討会」を設置することで国が再開を検討することである。

この「20%」は一審判決では認められていなかった。国からの謝罪、冬山登山研修会の再開は遺族側がずっと切望していたものだけに、「この部分が認められたのが一番大きい」と母・洋子さんも話した。



裁判を終え資料を前にする溝上国秀さんの両親(8月17日・溝上さん宅で撮影＝森田篤)

「次の安全登山へ結び付けられた。いままで支援してきた山の関係者が、青少年局長ら国の関係者が、国秀さんの両親の手を合わせ、両親へ謝罪。冬山登山研修会の再開に向け、事故の再発防止も誓った。

「国秀さんの遺影」とも生きてきた7年間の悲しみを伝えてほしい。これ以後の再発はないだろうと感じ、今後の研修会に活かしてほしい」と洋子さん。今後への期待を話した。

家族で戦った7年。「原告」という肩書きが取れてほっとした。裁判の終結という意味で解決はしなくても、心情的なところで解

「全面勝利和解」へ導いた30万人の署名の力。それは遺族への温かい励ましにもなった。

報告集会の終盤に溝上さん、内藤さん遺族は、壇上へ上がって次々に支援者へ頭を下げた。三恭司さんの父・悟さんは「この裁判の過程で、多くの素晴らしい方に出会った。支援してくださった多くの団体の方、専門家の方々に心から感謝したい。子どもを守った親の苦しみを理解し、励まして下さった方々の協力があったから全面勝利和解を勝ち取れたと涙を流した。

「当たり前前の謝罪に7年かかった」。国秀さんの母・洋子さんは「当たり前前の謝罪をもう7年以上かかった。国がの裁判で反省するべき点は反省し、今後の安全に生かされれば今までの月日も無駄ではなかったと思う。和解案項にあった安全検討会に注目して共に見守っていきたくと思う」と



壇上へ上がり、挨拶する溝上さんの家族(9月15日・尼崎労働福祉会館大ホールで撮影＝森田篤)



国が溝上さん宅へ謝罪に訪れる(8月4日・溝上さん宅前で撮影＝西田健悟)

「普通なら10年」と言われる国相手の裁判は事故から7年で終了した。損害賠償の支払いをはじめ遺族側の完全勝利内容で和解が成立し、今年8月に溝上さん宅を訪れた文部科学省幹部の代表者は事故に対する責任を認め、両親に加え国秀さんの遺影にも手を合わせ謝罪した。

「国が遺影に謝罪するケースは極めて異例。署名のおかげで国はとうとうにできなかったのかも知れない。署名活動をやってきてよかった。5年を数える裁判を終え、不更さん(国秀さん)はとうとう表情が話した。

「120%勝利」の和解内容に話まっていた30万人の思い。裁判結果は署名が導いたものだった。

【塚本京平】

勝利和解の背景にあったのは、30万人の署名による後押し。国秀さんの両親は声をそろえた。

国を相手取り、先の見えない中で始まった大日岳事故の裁判。その中で遺族らは署名活動を始めた。遺族、そして国秀さんら事故の犠牲者への謝罪を国に求めるため、署名への協力を求め、全国各地で頭を下げる日々。インターネットも利用し協力を呼びかけた。

もちろん誰もが署名活動の協力を積極的に求めたわけではない。(署名への)協力を求めた際に、涙を流したくなるようなひどいことを言われたこともある」と父・不二勇さんは振り返る。それでも4年を超えて集められた署名の提出回数は計14回、集まった数は30万筆を超えた。

そして――。

- 00年7月20日 溝上さんのお別れ式が母校の明星高校(大阪市天王寺区)で行われた。明星中学時代から大雪山でワンゲル部で活動していた溝上さんのお別れ式には、クラブ仲間や顧問など約400人が参加。神戸大ワンゲル部員が応援歌「宇宙を股に」を歌い別れを告げた。
- 01年2月26日 文部省は「北アルプス大日岳遭難事故調査報告書」を発表。「講師がルート選定を誤った」と認めながらも「雪庇の崩落は予見不可能」であり、この事故は不可抗力である」という結論を出し、謝罪はなかった。
- 02年3月5日 事故から丸2年たった3月5日、遺族は国を相手取り、総額約2億円の損害賠償を求め、富山地方裁判所に提訴した。
- 03年3月5日 国は謝罪を求める署名約4万1000人分のうち、命日にちなみ約3万5000人分の署名を文部科学省に提出。
- 04年6月9日 富山地検は、業務上過失致死容疑で書類送検されていた当時の引率講師2人を嫌疑不十分で不起訴処分とした。
- 05年3月4日 文部科学省に、4万6544筆の署名を提出。今年で3回目。前回まで提出したものも含めて15万679筆となった。国秀さんの母・洋子さんは、「本
- 06年1月11日 3年10ヶ月に及ぶ富山地裁での裁判が結審。
- 06年4月26日 原告側の主張を認め、国に約1億6700万円の支払いを命じる判決が富山地裁で言い渡された。
- 06年5月2日 国は一審の判決を不服として、名古屋高裁金沢支部に控訴した。「裁判所側が国の責任を認められて嬉しい」と感じたわが6日後の控訴に、遺族らは頭を下げた。
- 07年6月14日 横浜文化体育館前の署名活動で、101筆増え、署名が累計30万人分に達する。
- 07年7月26日 第三回和解協議が名古屋高裁金沢支部で行われ、国が事故再発防止のための安全検討会を設置すること、遺族に1億6700万円を支払うことを条件に和解が成立した。
- 07年8月2日 文部科学省へ14回目の署名提出。提出数は個人署名379筆(累計30万2997筆)、団体署名41筆(累計1917筆)。
- 07年8月4日 文科省スポーツ・青少年局の樋口局長ら文科省登山研修所を管理する職員3人が、溝上さんの自宅まで来て15万679筆となった。国秀さんの母・洋子さんは、「本

「全面勝利和解」へ導いた30万人の署名の力。それは遺族への温かい励ましにもなった。

報告集会の終盤に溝上さん、内藤さん遺族は、壇上へ上がって次々に支援者へ頭を下げた。三恭司さんの父・悟さんは「この裁判の過程で、多くの素晴らしい方に出会った。支援してくださった多くの団体の方、専門家の方々に心から感謝したい。子どもを守った親の苦しみを理解し、励まして下さった方々の協力があったから全面勝利和解を勝ち取れたと涙を流した。

「当たり前前の謝罪に7年かかった」。国秀さんの母・洋子さんは「当たり前前の謝罪をもう7年以上かかった。国がの裁判で反省するべき点は反省し、今後の安全に生かされれば今までの月日も無駄ではなかったと思う。和解案項にあった安全検討会に注目して共に見守っていきたくと思う」と

事故から7年半

訴訟から5年半

事故から謝罪までの歩み

来日日は署名を提出する日ではないんです。いまだにゆくりと子どものことを考えている暇もない状態です。こういう重みを文科省にもわかってほしい」と胸のうちを話した。

●06年1月11日 3年10ヶ月に及ぶ富山地裁での裁判が結審。

●06年4月26日 原告側の主張を認め、国に約1億6700万円の支払いを命じる判決が富山地裁で言い渡された。

●06年5月2日 国は一審の判決を不服として、名古屋高裁金沢支部に控訴した。「裁判所側が国の責任を認められて嬉しい」と感じたわが6日後の控訴に、遺族らは頭を下げた。

●07年6月14日 横浜文化体育館前の署名活動で、101筆増え、署名が累計30万人分に達する。

●07年7月26日 第三回和解協議が名古屋高裁金沢支部で行われ、国が事故再発防止のための安全検討会を設置すること、遺族に1億6700万円を支払うことを条件に和解が成立した。

●07年8月2日 文部科学省へ14回目の署名提出。提出数は個人署名379筆(累計30万2997筆)、団体署名41筆(累計1917筆)。

●07年8月4日 文科省スポーツ・青少年局の樋口局長ら文科省登山研修所を管理する職員3人が、溝上さんの自宅まで来て15万679筆となった。国秀さんの母・洋子さんは、「本

